
選択の許された谷底

一天草莽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選択の許された谷底

【Nコード】

N8360T

【作者名】

一天草莽

【あらすじ】

自殺権をテーマにした短編です。あまり明るい話ではないので、注意してください。ちなみに、当然ながらフィクションです。

(前書き)

これはフィクションであり、現実にはない自殺権をテーマにしてしまいました。別にこの短編で自殺権について議論を深めるといった意図はありません。もしかすると人によっては不快な思いをされるかもしれませんが、そこはどうかご容赦ください。

その深い奈落の底には、きつと多くの悲しみが眠っていることだろう。

闇に葬り去られたそれら悲しみの果てが、一体どのような決意を伴ったものなのか、そのすべてを知っているものはおそらく存在しない。きつと望まれることのない、本当にやりきれない絶望を引き込んだこともあるのだろう。

それでも、誰も、誰一人として、彼らの死に行く姿を前にしてもなお、実際に奈落の底へと旅立った彼らを引き留めることなどできなかった。

なぜならそれが、法律的にも許された選択だったから。認められた、数ある一つの権利だったのだから。

たとえば、誰もが理想として真の自由を求めながら、現実にはすべてを自由にするなど許されなかった時代。そこに生きていた人々は、どれほどの不満や不幸をその身に溜め込んでいたことだろう。

吐き出すことができるなら、それに越したことはない。発散できることならば、それでチャラにしてしまえばいい。他人に迷惑をかけない限りなら、そんなことが許されたって構わないのではないか。

だからこそこの時代、それゆえにこのN国では、多くの権利とまた同様にすべての人間にとある権利が付与されている。それは名を、自殺権。文字通り、当人が望めばその死を許容するというものであった。

それはあたかも、桜の花が散っていくときのよう。まだ散るには早すぎると誰もが儚く憂えて惜しむのに、潔く散っていく桜の花びらのよう。

それはあたかも、死期を悟った猫のよう。自らの死に場所を求め

てさまよう、誰にも見向きされない野良猫のよう。

それは決して、皆が皆望んで勝ち得た権利ではない。しかしながらそれは、誰もが誰も拒否した権利でもないのだ。ただそれは、誰にも平等に与えられていて、その権利を奪い取ることは誰にもできない代物に違いなかった。

だからもし、それが議論の話題にあがるだけにとどまらず、ふとした瞬間に身近な一報として耳にすることがあってもおかしくないはずなのだ。

「自殺だって？」

それは、驚きによって伴われた半信半疑を含む声。

それは、冗談では済まされないタブーにも似た、純粹に興味を引く噂。

「ああ、らしいぜ」

「でも、そりゃあ……ずいぶんと急な話だな」

「ああ、当事者じゃない俺たちにとってはいきなりのことで、すなわち驚きだ」

とはいえ、その驚きは珍しさだけのせいではないだろう。普段聞き慣れてはいるものの抽象的に過ぎない言葉が、突然その実体を露にしたことで、少なからず彼らの恐怖、たとえば畏怖や忌避の念を引き起こしたせいでもあった。

「それにしても、あの穏やかな佐藤がか？」

「そうさ。あの自己主張の弱き佐藤がだ」

「あの口答えもしない、もの静かな佐藤がか？」

「そうだ。あのなされるがままの佐藤がさ」

佐藤。おそらく彼のことを知らない生徒はこのクラスにいないだろう。だが一方で、彼を知らぬ生徒はいないといいながら、同様に彼のことを詳しく知る人間もないのかもしれない。そのことを端的に表すのならば、佐藤はクラスの輪を遠く離れた、友人の少ない、いじめられっ子であった。

「もしかして、佐藤は苦しんだのだろうか」

「何を？」

「いじめをさ」

「……かもしれないな」

少なからず、いじめの事実はクラスメイトに確認されていた。

とはいえ、彼のいじめはクラスの面前で公然と行われていたわけではない。むしろ実行犯を中心に、その事実をひたむきに隠そうという意図が少なからず感じられていて、おそらく教師連中にはその痕跡すら見出せなかったのだろう。

「しかし、自殺か」

「衝撃かい？」

「うん、なんだか罪悪感があるな」

「まあ、確かにね」

そう言って彼、尾崎は腕を組んだ。そしてそのまま遠い目をして、こう呟く。

「……俺たちは傍観していただけなんだよな」

「そうなんだけど、それにしても言い方が他人事だな」

「悪いと思う。でもさ、こうして自殺と聞いても、いまいち実感がわかなくてさ」

たとえばもし、彼が法的に結婚することのできる年齢に達したとしても、そのときに結婚するべき相手が隣にでもいなければ、彼はしかし結婚という言葉について実感を持って理解することはできないだろう。

物事とは、すべからくそういうものである。

自分にとって直接的に関係のないものは、所詮、頭の中で理解しているつもりになっているに過ぎない。

「なあ、佐藤に会えるかな？」

そう言ったのは尾崎の親友である、木川だった。

ところが尾崎は、渋い顔をして答える。

「どうやら今日は佐藤の奴、すでに学校を欠席しているらしいな。自殺って話が真実のものなら、もう彼は手続きに入っているころだ

る。」

自殺権とは、文字通り自殺する権利のことである。

しかしながら、権利とはいえ、もちろん身勝手に自殺することを許すものではない。法律に定められた資格と手順を満たしてこそ、それが初めて権利として認められるのだ。

それはまず、本人が十八歳以上であること。そして、自らがそれを正式に望むこと。基本的にそれら条件は、本人が必要事項を漏れなく記入した書類を、役場の窓口に提出することで確認される。

それが受諾されると、いよいよ自殺への道が開かれてしまう。

まずは日取りと場所の決定である。これは多くの場合、申請から一ヶ月以内に、最寄りの火葬場付近の崖で行われると決まっている。それが済むと、本人の身辺整理のための時間が与えられる。また、それと平行して関係各位への通達がなされる。友人であるとか、親戚であるとか、大抵の知人には書面によって日取り等が通達される。

そして最後は唯一正式に認められた方法である、整備された崖からの飛び降り自殺なのであるが（ちなみに、なぜ飛び降り自殺しか認められていないのかといえば、この権利の履行にはそれだけの覚悟を必要とするということ、つまり軽々しく自殺を選択させないための防波堤としているからなのであるが）、その前に一つだけ必ず志願者が通過しなければならない最後の関門がある。

それは、事前葬式というものだ。自殺志願者の葬式が、自殺実行前に執り行われるのである。遺影や棺の代わりに、まだ生きている自殺志願者を前にして、肅々と彼の葬式が行われるのだ。

この葬式には、色々な意味が含まれている。

たとえばそれは、友人や知人の、自殺を思いとどまらせるような言葉であり。

たとえばそれは、本人からの懺悔、後悔、諦観の吐露であり。

たとえばそれは、仏僧による読経であり。

たとえばそれは、自殺を覚悟したわが子を前に泣き叫ぶ両親の、普遍なる愛情を伝える最後の可能性である。

振り返れば数多くの希望をなくした若者が、この事前葬式を実際に体験して初めて、見失っていた幸せを見出すことにより自殺を思いとどまったこともある。多くの希望なき大人達も、やはりこれによつて思いとどまることがあった。

それでもなお、思いとどまることなく自殺へと突き進む人間が毎年三万を超えることもまた、疑いようのない事実ではあるのだが。

「佐藤の事前葬はいつになるか、わからないかな？」

「わかったとして、お前は行くつもりなのか？」

そうやって尾崎に面と向かつて厳しく追求されると、木川も自らの感情に疑念を抱かずにはいられない。

「……だって、彼はクラスメイトだろ？」

「ああ、クラスメイトだ。だけどたったそれだけの理由で、君は他人の生き死について容易く関われるのかい？　今まで見て見ぬ振りをし続けてきた俺たちに、彼の決断を見届ける資格があるとでもいうのかい？」

そこまで指摘されると木川は、どうしても迷ってしまうのだ。

果たして自分は、佐藤に一体何を言うために事前葬へ行こうというのか。

それとも自分は、単なる義理として彼の決断を見届けようとしているだけなのか。

いつしか胸の痛みを覚え始めた彼は、厳しい顔つきを崩さない尾崎の鋭い視線から逃れるように顔をそらせた。

教室の窓からそつと見上げた空は、いやなくらいに青々と晴れ渡っていて、それが彼にはいかにも皮肉としか思えなかった。

それは、翌々週の土曜日だった。

木川は制服に身を包むと重々しく家を後にし、すぐ近所のバス停から午後一番のバスに乗り込んだ。もちろん向かう先は、この町の外れにひっそりと佇む式場である。

式場前のバス停で下車した彼は、立派な式場を直近から感慨深く見上げるよりも先に、バスを出迎えた尾崎の姿を目にして驚嘆した。「来ないと思っていた！ くそう、てつきり！」

先ほどまで暗く沈んでいたことも忘れ、友人の前で悔しそうに木川は地団駄を踏む。

「やめてくれ。今すぐにやめてくれ。友人である俺まで非常識だと思われる」

ところがいたって冷静な尾崎に注意されてしまい、木川は自分の非常識さに思わず身を縮こまらせてしまう。なぜなら式場に入っていく人たちは誰もがすべて、沈痛な表情を浮かべていたのだから。

今日はこの式場で、自殺を決意した佐藤の事前葬式が行われるのだ。彼らの周囲はすでに、重々しい空気に包まれていた。

「ほら、わかつたら早く式場に入ろうぜ？」

「わかつてるよ……」

尾崎に肩を叩かれた木川は、渋々といった様子で歩き出す。

もちろんこれは彼らにとっても、気乗りするような出来事ではなかったのだ。今でも否定できるものなら、否定してしまいたいと願うほどだったのだから。

式場の中は、すでに人で埋め尽くされていた。

尾崎と木川は溢れつつある人混みに圧倒されながら、佐藤の自殺という決断が、少なくともこれほどの人間に影響を与えるものだと実感し、それが不謹慎だとわかつていても、思わず感嘆してしまうのだった。

「俺たちは単なるクラスメイトだから、後ろのほうに座るか」

「まあ、そうだろうな。それでも人がもつと多くなれば、俺たちは立っていなくちゃならなくなるだろうけど」

そんな心配をめぐらせた彼らではあったが、さすがに全員が座れないほどの満席になることはないまま、アナウンスの声で肅々と佐藤の事前葬式が開始された。

式場の係員に手を引かれ、列席者の前の壇上に一っだけ置かれて
いる小奇麗な椅子へと、集まった面々と向き合うように座らせられ
る佐藤。その顔は、感情という感情もなく、明確な緊張もなく、た
だまっさらに彼の心境を語っていた。

彼の登場とともに湧き上がった小さなざわめきも、やがて始まっ
た仏僧による読経によってかき消されてしまう。それでもわずかに
漏れ聞こえたすすり泣きは、果たして一体誰のものであるのか。

佐藤は始終、能面のような表情を崩さなかった。

それから、いくつもの修羅場があった。

「あんた……、なんて馬鹿なことを！ あんなにお腹を痛めて産ん
であげたのに、今度は私の心を痛めて死んでいくつもりなのかい？」

「母さんが泣いているのがわからんのか！ お前はそこまで馬鹿に
なったのか！ 父さんだつてな、お前が育つていくことこそが幸せ
だったというのに！」

「いいかい、佐藤。先生はな、今でもお前の相談に乗る用意がで
きている。今までは何もできなかったかもしれないが、これからはお
前のために尽力したいんだ」

「佐藤君……。僕は君と高校で離れ離れになつてしまつたけど、子
供のころから友達だつたじゃないか……。僕を残して先立つなんて、
あまりにもひどいよ」

だのに、佐藤はそのすべてを飄々と切り抜けてみせた。

さすがに彼の風貌から余裕というものは感じられなかったが、ま
た同様に動揺も苦悩も見て取られなかったからであろう。誰もが彼
を思いとどまらせることなど不可能であると想像した。

ところが、最後に佐藤の前へ声を掛けに行く面々は、その諦めと
いうものを知らなかった。決意を胸に秘め、確かな足取りで突き進
んでいた。

その数人の男子生徒である彼らこそ、クラスで佐藤をいじめてい
た張本人たちである。

「……すまなかつた！」

開口一番、彼らは口をそろえて謝罪した。頭を深く下げながら、祈るように、哀願するように、ただただ佐藤の返事を待っている。

「……だけどね」

重い口を開けた佐藤は、その声で顔を上げた彼らの顔を眺め回しながら、こう続ける。

「君たちに謝られたところで、僕は何も変わらないよ。許して欲しいっていうんなら、うん、別に許してあげるけれど」

佐藤はそう言うが、それが望んでいた許しとは似ても似つかぬ投げやり口調だったためか、彼らはたまらず佐藤に向かって身を乗り出す。

本当の許しを、真の許しを得るために。

「もしかして社会に不満があるのか？ その、クラスの状況に問題があつたのか？」

「もしも俺たちのいじめが原因だつていうんなら、佐藤。俺たちは謝るよ。……だから、こんな後味悪いやり方だけは止めてくれ」

しかし、そう言った彼らの言葉を遮るように、佐藤は首を振りながら口を開く。

まるでそれは、何もかもが手遅れで、無駄であると言わんばかりに。

「……違うんだ。僕はね、自分を取り囲む社会なんか実際どうでもいい。君たちのことだつて恨んじやない。僕はもう単純に、自分に絶望してしまっただけなんだ」

「でもさ、お前を絶望させてしまったのは、俺たちなんだから？」

「そういう意味では、うん、むしろ感謝したいくらいだ」

「佐藤……」

彼らはその後も佐藤に語り続けたが、ついに佐藤は折れなかつた。柳に雪折れなしの言葉通り、意志薄弱たる佐藤の決意は、並々ならぬものがあつたのだらう。

「悔しいな」

静まり返った式場の中で突如そう呟いたのは、今まで後方にて事の成り行きを黙って見守っていた木川であった。

「木川？」

「なあ尾崎。俺はずっと黙っている心積もりだったが、いよいよ佐藤の奴に言つてやりたくなつたよ」

「おいおい、いきなりどうしたんだよ？ お前には特別、あいつには何かを言う資格なんてないだろ？」

尾崎の言葉を前に、とつさに自問自答を繰り返した木川。確かに今、佐藤と同じクラスとはいえ交流のなかつた木川の立場から、彼を諭すだけの思いや言葉などが出てくる可能性は低いだろう。それでも、やがて自分の中で一つの答えを見出した木川は、隣で訝しがる尾崎に向かってこう言った。

「ああ、そうかもしれないな。それにさ、今さら俺には佐藤のところへ行く理由なんてないだろうよ。そしてこれは、間違つても優しさや正義なんかじゃない。だけど俺はさ、誰にも死んでほしくないんだ。誰かが自分から死にたいなんて言ったら、俺は悲しいんだ。だって、まるで生を否定されてしまうかのようだろう？」

木川はそう呟くと、尾崎の制止も振り切り、みんなの前で悲痛な覚悟を噛み締めている佐藤に向かって駆け出した。

そして初めて驚いた顔を見せる佐藤の前に、木川は声を張り上げる。

「おい佐藤、お前も権利なんかに踊らされるなよ！ 死んでいいからって、自殺していいからって、たとえそれが認められていたつてお前がそれを選ぶことを俺は見逃せないんだ！ もちろん、お前に向かつて生きるなんて叫ぶ俺も無責任なのかもしれない。でもさ、みんなが不幸になるといふことがわかつていて、それでもお前が自分のためだけにそれを選ぶというのなら、俺は容赦なくお前をぶん殴っちまうぞ！ 権利を盾に身勝手を振り回す奴が、俺は大嫌いなんだ！」

木川が佐藤に挑発的な口調で呼びかけたのは、何も本当に怒っていたからではない。とにかく佐藤の返事を、何でも構わないから彼の本心をさらけ出したいと願ったことである。そのためには、少々強引な方法でも彼はためらわなかった。

「な、なんだよ……。君は今まで、僕のことなんか見て見ぬ振りをし続けてきたというのに！ 関係ないくせに！」

当然のこと、佐藤にとってみれば、そんな木川こそ癪に障った。最後の最後に自分の選択を否定してくる彼の姿が、たまらなく憎らしく見えたことだろう。

我慢できず顔をゆがめた佐藤を目にし、すかさず木川はきつく言葉を投げかける。

「だったらお前は俺に向かって助けを求めてきたのかよ！ お前もそうだろうけどさ、俺だっていつも、自分自身のことと精一杯なんだよ！ そもそも、ただでさえ俺たち高校生っていう人間はな、心身ともに不安定な思春期であり、自分の将来を選択する重大な分岐点にいるから苦悩してしまう時期であり、あまつさえどこまでも馬鹿で無力な人間に過ぎないんだ！ わざわざ相手から頼まれもしないまま、お節介に手を差し延べている余裕なんて、普通は誰にもないんだよ！」

口では威圧的に叫びながら、そっと心の中で手を差し延べる木川ではあるが、それは上手く伝わらず。

「僕にだってもう余裕はないさ！ そうさ、生きる余裕がないのさ！」

そう声を限りに叫んだ佐藤は、言葉通りに一杯一杯だった。もう他には何も考えることができないほど、心にも余裕がなかった。

心身ともに追い込まれ、磨り減り、何もかもを失ってこそ、希望なき絶望の中でこそ、彼はこの選択を決断してみせたのだから。

そんな佐藤の心境を知ってか知らずか、木川は語調をやわらげ、語りかける。

「余裕がないときに選び取るものなんて、お前が本心から望むもの

じゃないだろ？ 選んだつもりになっていて、選ばされているんじゃないのか？」

それは権利という言葉に誤魔化された、破滅への甘い罠であるのかも知れない。権利は時として、無自覚な義務と紙一重になり、そうしなければならないと、そうするべきであると、自他共に強要されてしまうこともあるのだから。

「……だけどこれはね、僕らに許された選択なんだ。たとえ行き詰った末の決断だとしても、それを間違いであると断言される筋合いはないよ」

しかし何事も権利によって保障されてしまうと、人は理屈によってそれを批判することが一層困難になってしまふ。根拠なく「駄目、絶対」と言い切ることもできなくなり、かすかで頼りないものにそのよりどころを求めてしまふものだ。

たとえば、感情論。

「けれど、お前が自殺してしまったら、ここにいるみんなは悲しむだろ？ 自由になるのも、楽になるというのも、それは自殺するお前だけだろ？ なのにさ、お前は本当にそんな身勝手を……」

それを言い終える前に、自分の失言に気がついた木川の懸念どおり、佐藤はその言葉にいち早く反応した。

「もしもこれが身勝手だというのなら、そんな君の意見こそ身勝手だよ。だって、少なくとも僕の選び取った自殺という行為は、きちんと権利として保障されているからね。そう、だからこんなの、僕にしてみれば自己決定の一つだよ」

数ある未来の選択肢の中から、自分に最もふさわしいものを選び取ったのだと、そう宣言するかのように佐藤は胸を張った。

「自己決定って、逃避をいのように言いつくろっているだけじゃないのか？」

そう指摘した木川に対しても、臆することなく、佐藤はこう言い返す。

「決して逃避じゃない。これはね、僕にとっては邁進だよ」

それはもしかすると、世間的に見れば現実逃避に他ならないかもしれない。しかしながら、彼にとっては確かに一つの自己実現だったのだ。生きることがそのまま苦行につながる気のある佐藤にとって自殺とは、彼にまがいなりにも自由を与えるものであり、彼に一時的にも救いをもたらすものであり、何より、生まれて初めて自ら選び取ることのできた未来だったのだから。

たとえば彼がどのような状況で、どういう心境で、いかなる経緯でこの結論にたどり着いたのか、それを全く考慮せずに自分の意見を押し付けることは、必ずしも褒められた行為ではないだろう。無論、誰も褒められるために他人の自殺を思いとどまらせようとするのではないのかもしれないが、それは大きなお世話以前に、小さな自己陶醉に過ぎないのかもしれない。

自分の意見こそが絶対だと　もちろん、これはどちらにも言えることかもしれないが　信じて疑わず、一方的な価値観で主張や糾弾を繰り返す限り、両者の溝は決して埋まることもないだろう。相手に同情しろとまでは言わない。互いに共感しろとも言わない。それでも最低限、まずは自分の思考を疑ってみるべきではないか。しかし、木川は簡単に佐藤の言葉を受け入れることができない。「なあ、耐えろよ。耐えてくれよ、佐藤。生きるってことは、確かにそれだけで幸せを感じるには難しいものがあると思う。でもさ、だからって自殺してどうするんだよ……」

ついに涙を流した木川を不思議そうに見つめながら、佐藤は穏やかに答えた。

「……どうするってこともないよ。それでも僕は、自ら望んで自殺するだけなんだ。たとえそれが幸せのためでないとしても、本来、僕らは自分の幸せのためだけに決断を下すわけじゃないんだ。数ある選択肢の中から何かを選ぶということは、必ずしも幸福だけが理由となるわけではないから。合理的にしる、感情的にしる、決断の背後にあるものが幸福であるべきだと、そう決め付けられるのは僕にとって不幸だ」

「じゃあ、他に道はないのか？」

「もちろんあるかもしれない。だけど僕ら人間は、数ある多くの道から自由にそれを選び取れるべきなんだ。少なくともこの自殺は、僕にとつての責任ある未来と、自由を求めるための自由なのだと思う」

そう言った佐藤は、この日初めて笑顔を見せ。

「よりもよつて自由か。もし俺に、お前を引き止めるだけの自由と権利があれば……」

そう言った木川は、悔しそうに歯を食いしばるのみだった。

それから数日後、佐藤は権利を行使した。

その知らせを淡々と受け取るしかなかった木川と尾崎の二人は、言いようのない虚無感と、はっきりしない後悔や自責の念を胸に抱くのだった。

「なあ、他にやり方があったのかな？」

尾崎越しに佐藤の姿を見る木川は、頼りない口調ですがるように尋ねる。そんな木川の未練を断ち切るように、友として、尾崎は突き放したように答える。

「残念だが、もう過ぎたことは諦めるしかないだろ。もしも俺たちにやり方が残されているとすれば、今後は誰かが自殺を考えたりしないように、みんなでお互いに支えあつて幸せを作っていくしかないだろう」

「そうだよな。実際に自殺権が認められている以上、もはやそうすることではか、他人の自殺を食い止めることはできないのかもしれない」

そう言つて空を見上げる木川であつたが、その顔は苦渋に満ちていた。

なぜなら彼は、佐藤の死後、こんなことを知ってしまったからだろう。

「それにしても、佐藤をいじめていた奴らも罪悪感に駆られて自殺

を申請するなんて……」

自殺権とは、法的に認められた権利である。

それは、すでに自殺を選んでしまったすべての悲しき人たちに対して、手向け代わりに与えられた社会的な免罪符であり。

またそれは、現状に苦しみを覚える人間への、社会的な救済や保障代わりに与えられた、どこまでも後ろ向きな自殺対策であった。

いつしか国民の権利として認めらるることとなった自殺は、もはや問題として扱われることもなく。

今日もまた、年間三万人を越える自殺者のあとが絶たない。

(後書き)

駄文、失礼いたしました。

本当はもっと深く考察したいところでしたが、作者の力量不足で、どうしても浅慮で欺瞞に満ちた文章となってしまいました。おそろく読後、不満や疑念が残るような短編だったことだろうと思われるます。この場を借りて、謝罪いたします。申し訳ありません。

ところで、この短編のテーマとした自殺権のことですが、その賛否以前に、そもそも誰もが自殺を考えることなどないような社会を作っていただけたらいいですね。できることならば、そんな未来への明るい展望を作中に滲ませたかったものです。

皆さんにえらそうなことを言えるような立場ではありませんが、この世界の誰もがしつかり生き抜いていただけたいいなと、そう思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360t/>

選択の許された谷底

2011年6月5日04時40分発行